

接ぎ木－ワシントン州における日系女性開拓民の歴史

ゲイル・M・ノムラ 著

土居万亀子* ・ 山田政美**訳

Gail M. Nomura, "Tsugiki, a Grafting:
A History of a Japanese Pioneer Woman in Washington State"
Translated by Makiko Doi and Masayoshi YAMADA

我々大半の想像の中では、女性開拓民はアメリカの平原を西に向かって旅をする、日除け帽子を被った白人の女性として描かれてくる。日本から東に向かって太平洋を渡り、アメリカにやって来た女性開拓民のことを知っている人は殆どいない。これらの日系女性開拓者の中には、その運命の地が太平洋沿岸北西部にあった者がいたのであった。

ワシントン州では、日本からの女性開拓者と言えばイッセイ (issei)－初代の移民世代－と、そのニセイ (nisei)－2代目の世代－である合衆国生まれの娘たちであって、20世紀前半の殆どの時期、この州では非白人女性の最大グループを成す人たちであった。¹⁾ 一世の女性は農業や小事業の分野で労働力を提供し、これが州経済の発展に寄与したのであった。さらには、ワシントン州において存立可能な日系アメリカ人社会の確立に欠くべからざる人たちであったのである。ところが、これらの女性の歴史について殆ど知られていないのである。²⁾ ワシントン州に生きた日系女性開拓者の歴史に残る体験を探る一つの方法として、小論ではひとりの日本人女性開拓者、富田貞子の生涯を考察する。

富田貞子への取材の間に、彼女の生涯に関するいくつかの事実を知り得ることができたのである。しかしながら、このように口を通して語られた歴史以上に、富田の体験は彼女が日本で女学生であったころからずっと書き続けてきた文字で綴られた豊かな遺産である短歌によって明らかにされるのである。富田が書いた短歌は、彼女にとっては一種の日記として、つまり彼女がアメリカの一部となっていく際に彼女の心の最も深い部分に潜んで

いた諸々の気持ちを言葉に表す手段としての役割を果たしたものであった。富田の短歌を読むと、アメリカでの自分の生活をどのように見ており、そしてワシントン州での日本人女性開拓者の本質はいかなるものと捕らえていたのかを洞察できるのである。確かに、富田がある歌集の中で、自分が詠んだ歌の部分に付けた題名であったツギキという語は、木を接ぐこと、または接ぎ木した木を意味するもので、自分のような女性が持った諸々の開拓経験を経てワシントン州に根付いてきた日系アメリカ人「接ぎ木」社会に対する彼女の見方を表わしている語である。

短歌は、富田のような日系移民者にとってはごく自然で、またどこにでもあるような表現の手段であった。19世紀の末期に義務教育を制度としていた国からやって来ているので、一世が高い教養を備えていたのはしばしばあることであった。しかしながら、短歌を作るためには高度の教養と稀なる才能が必要であるというものではなかった。俳句は、5-7-5音節で3行からなる17音節の日本の短い詩で、この方が合衆国ではよく知られているのだが、短歌の方がより伝統的な詩型である。短歌というのは、5-7-5-7-7音節が連続した5行からなる31音節の日本の短詩である。日本人は古来から、自分の最も心の深いところにある感情を表現するために、短歌を用いた。最も初期の頃の日本の詩集に収まっている叙情詩は、生命、愛、別離の悲しみを人に語る時に簡潔な短歌形式を用いていた。貴族と同様に庶民も短歌を書いた。この短歌は、幾世紀にもわたって、あらゆる階級の男女にとって最も人気のある詩的表現手段であったのである。集中と凝縮というものが短歌の本質であり、その簡潔な31音節の形で、日本人は、さもなくば多く

* セントラルワシントン大学（付属図書館）

** 島根大学教育学部英語科教育（英語学）研究室

のページ、ときには何巻もの書物にすることが必要になるかもしれないと思われる内容を、人に伝えることができたのであった。

富田のような日系移民者たちは、アメリカにこの詩型を持ち込んできたのであり、それによって自分たちの新しい生活を記録したのであった。アメリカで一世によって作られた短歌は、新しい土地に根を下ろしていく移民世代が抱いたイメージや感情、そして感受性を映し出したものであった。富田貞子は、自分の「接ぎ木」短歌の多くに伝統的な日本のイメージである桜の木を用いて、アメリカという台木に日本人移民者が接ぎ木をしていく過程をメタフォリカーに詠いあげたのであった。したがって、伝統的な詩型とメタファーを使うことで、富田は一世移民の経験を表現する新しい意味を創造したのであった。一世の詩人たちは、日本での生活とは余りにも異なったこの移民経験を書くことで、これまでになかったメタファーやイメージを創造し、新しい語彙も加えたのであった。富田がワシントン州東部で詠った初期の短歌には、日本では知られていなかったセージブラッシュと砂漠が詠われており、その短歌の中には英語が詠み込まれたものである。一世が書いた短歌それ自体は、新しい土地にうまく収まり、それを詠う詩人は短歌の古い形式を維持しながらも内容と言葉は新しい土地向けにしたのであった。富田の短歌は、口述歴史やその他の散文の物語と相まって、ワシントン州での日系女性移民者の体験をより理解できるものにしてくれたのである。

取材の中で、富田は日本の大阪府で1896年12月1日に松井家の9人の子供の2番目として生まれたと語った。女学校を卒業したが、在学中に短歌を書くことを学んだ。恩師が「ゆかり」という号をくれた。アメリカに来てもこの号を使った。進学して師範学校で1年半の課程を終え、小学校教師の教員免許を取った。1920年に結婚するまで教壇に立っていた。

当時の日本女性の大半は25歳以前に結婚をしたもので、したがって富田も20代半ばの年になると結婚を勧められたのであった。家族がまとめた見合い結婚が恋愛結婚よりは日本では当たり前のことであって、それというのも結婚は個人同士の契約というよりは家と家との契約であったからであった。仲人を通してワシントン州ワパトの近くで農業をしていた後の夫、富田正一（まき）と縁組みをさせられた。相手の写真を見せられ、相手の素姓や性格について聞かされた。日本のつい隣の県にいる相手の家族に会いに行ったが、その人たちに好感を抱いた。富田はこの夫となる男性とは、結婚までによく知り合うための期間としての2年間、お互いに手紙を交わした。1920

年の暮れ、富田正一が結婚式のために帰国した。それから、新婚夫婦は2ヶ月ほど日本国内を旅行した後、1921年2月のこと、ヤキマインディアン保護地で農業をするためにワパトに出発した。

富田の夫は、拡大家族³⁾の家長である彼女の祖父母に対して、3年すれば二人は帰国するからと約束していた。だからこそ祖父母は、彼女がアメリカで働くのは3年、長びいてもせいぜい5年間だろうと思って結婚に同意したのだった。3年の滞在予定が60年以上にもなろうとは、誰にも分からぬことであった。もっとも富田の話では、ワシントン州に到着してその貧しい状況を目の当たりにしたとき、そんな短期間では夫婦が日本へ帰ることはできまいと分かったという。確かに、彼女は両親に再び会うことはなかったのであった。

富田の短歌は、日本に残してきた家族や生活への一世の女性たちの思いを示すものである。アメリカでの新しい生活を始めたものの、これら女性たちははまだ故国に確とした根を持っていたのであった。家族との絆は強かった。短歌の一つに、富田は両親の別れの言葉を思い出してこう詠っている：

幸せに暮らせと握りたまひにし

父母の感触今も吾が手に⁴⁾

富田は、新しい土地での彼女の幸せを望む両親の言葉をいつまでも忘れないでいた。別れの言葉と手の感触に込められた両親の愛情の温もりは、それからの別離の年月の間ずっと彼女を支えてくれるものであった。次には富田が、この幸せを望む気持ちをアメリカの自分の子供たちに伝えたのであった。

家族との別離が、家族の絆の深さについてこれまでは気付かなかったいくつもの洞察を富田にさせることになった。このことは、富田がその後も繰り返し好んで語って聞かせることになるある出来事から生まれた、父親を詠った短歌にはっきり表われている。彼女にとっての結婚の意味は、夫と子供が自分の生活と思いの焦点となるということであり、また働くことで故国へ帰りたいという気持ちを抱く暇がなくなるのだというものであった。日本へ帰ることなど考えたこともないし、アメリカでの自分の人生に悲しみなどなかったと、そう彼女は言い切っている。ところが、彼女の夫は、彼女が畑に出て、涙を流しているのを見たことがあったのである。その時、父親からの手紙を受け取った後なので、ホームシックになったのだな、と思ったという。その晩、夕食の席で、夫は彼女を可哀相に思い、ヤマキのこの過酷な地からはるか故郷を思う気持ちは自分にもよく分かると言ってやった。ところが、驚いたことには、富田は日本へ帰りたい

気持ちなどさらさらないと答えたのであった。手紙を読んで泣いたのは、実は、いままで自分が理解していなかった優しく思いやりのある父の姿がその手紙に読み取れたからであると言った（『北米百年桜』 p. 325）。

怖き父がいづくに秘めし愛情かと

優しき文にわが泣きし日よ

「優しい手紙」は、新しい土地で彼女が元気で、幸せであるのかを尋ねていた。富田は、子供の頃の厳格な父親ではなくて、もっと大きな父親の姿を見るようになった。我が子に対する父親の愛情が分かるようになった。涙は、理解の涙であったのだった。

二人を隔てる何千マイルもの彼方の家族と故国と、この二人を結び付ける絆の強さは、富田の別の短歌に明らかである。家族から小包を受け取った時の気持ちが凝縮されている（前掲書、p. 490）

日本より来しと思えば包装の

紙さえ親し捨て去りかねつ

一世の女性たちは、1890年代からヤキマ盆地に住み着いてきたのだが、それにしても1921年、富田がワバトに來た年でも、盆地は未だ荒れた開拓地であった。日本を出て裕福な生活に入るところか、富田は原始的な開拓者生活を始めることになった。伊藤一男の『一世：北米の日本人移民者の歴史』（pp. 428-29）の中で、富田は、ワバトの家は「俄か作りの2部屋の小屋で、掘立て小屋に毛が生えた程度のものであった」と書いている。日本で知っている人たちは誰でも電気を使っていたのに、ワバトには「電灯がなかったので、毎朝灯油ランプを磨かなければならなかった。家の中には薪か石灰を燃べる小さなストーブが1台あったが、私はセージブラッシュの根を採って帰って、それも燃料に使ったのだった」と書いてある。水道などはなかった。水は戸外の井戸から汲み上げねばならなかった。天候とて穏やかなものではなかった。富田は思い出してみても、真冬に家の中でも余りにも寒かったので「台所の棚に置いた卵が割れる音が聞こえた」ほどであり、「シーツは頸の下のところで折り返されているところに、夜になって自分の吐いた息のため霜がびっしり付いていた」というようなことがあった。夏が唸るが如くやって來た時、「気温は100度を越え、焼け付くような暑さであった」し、また夜には富田夫婦は「桃の木の下に毛布を広げて」そこで眠らねばならなかった。

富田は、ヤキマインディアン保護地で農業に従事する夫の手伝いをした。ここで、夫は干し草を栽培するための土地を賃借していたのだった。ところが、1921年彼女がやって來た年と、1923年に再び、ワシントン州はこれ

までよりも厳しい外国人排斥土地法を通過させた。反日活動家たちが内務省に圧力を掛けて、この法律をヤキマインディアン保護地にも適用させたのであった。そのため、ヤキマインディアン局は日系一世に土地を賃借するのを中止させるを得ない状況になった。というのも、この新外国人排斥土地法は土地の所有を禁ずるのみならず、アメリカ市民となる意思ありと登録を良心的に実行していなかった者たちへの土地の賃借も、小作も、借地契約書の発行までも禁じていたからであった。人種的理由だけで日本人はアメリカ合衆国の法律で厳しく帰化の権利を拒否されていたから、当の日本人が市民となる意思を良心的に示すすべもなかったのであった。したがって、ワシントン州でも、あるいは保護地でも、日本人は土地を賃借する資格がなかったというわけである。富田夫妻は、ヤキマインディアン保護地の中の自分たちが耕作してきた農園の賃借権を失ってしまった。

幸いにも、富田の夫は熟練農業者であったので、ある白人の種苗園経営者がすぐに彼を雇い入れ、セイタスにある自分の種苗園の監督者とした。富田は、自分の夫の下で働く労働者たちのための賄い婦として働いた。思い出すと、最初は労働者たちに、それがすんでから自分の家族に食事をさせるために、狭い家の中で代わり番で料理をしなければならなかったと言う。最初の子供が生まれたのはセイタスであった。

富田にとっては、セイタスはワバト以上に辺鄙で人里離れたワシントンの地であった。日本人の顔を見たいと思えば、五マイルの道を歩いて行かねばならなかった。これほど孤立した状況にあったので、自分のために短歌を書いては生活や思いを書き留めて、慰めていた。

一世の女性開拓者は、ワシントン州の極めて孤立した地域に住んでいることがしばしばであった。富田はこのような生活の寂しさと単調さを詩の形で表わしたのだった。このような生活の中では、今日と明日とを分ける唯一のものは、太陽が昇ることと沈むことであったと言った（『北米百年桜』 p. 519）：

近隣は五哩のかなた人を見ぬ

いく日つづきて今日も昏れぬる

この孤立した生活は、西部の殆どの女性開拓者には共通のもので、自然の苛酷さに晒されていたこともまた同様であった。開拓者が手造りで建てた家は、暴風雨に完全に耐え得るようなものではなかった。富田の詩は、この休まない自然の侵入を雄弁に語っている（前掲書、p. 519）：

春あらしヤキマ平原を吹き荒れて

家の中さえ砂塵おびただし

ヤキマ盆地は、水と汗で花を咲かせることができると言ってもよいような砂漠の地であった。住民は、土地を耕しては砂漠とセージブラッシュの地をアルファルファや玉ねぎやトマトや豆やメロンが採れる肥沃な畑に変えていったのだった。別の歌で富田は、土地を耕す移民たちの苦闘に対して彼女が実際に感じたことを詠んでいる(前掲書, p. 519):

セージ原沃のとなりしと聞きにしが
風吹く季節砂塵すべなし

執拗な砂は、この新たに肥沃な土地に変えられたところをいつなんどき元の姿に戻してしまうかもしれない砂漠のことや、そしてまた外国人としての日本人が賃借した土地で手にした薄っぺらな成功の足場のことをいつも思い起こさせたのであった。いつなんどきでも、渦巻く砂嵐が彼等を巻き込んで、肥沃な平原をセージブラッシュの砂漠にしてしまうこともあり得たのであった。

富田の詩は、新しく開拓されたヤキマ盆地の中にある砂漠の砂のことだけでなく、苛酷な砂漠の暑さをも呼び覚ますものである(前掲書, p. 539):

忙しく豆摘み居れば足もとの
小草にそそぐ風さえ熱く

逆境に直面する忍耐強さが初期の一世女性の特徴的な点であった。この精神は子供達に教えられ、子供たちは両親と共に畑に出て働いたのであった。富田はこう書いている(前掲書, p. 539):

今暫くこの暑さにも耐えなばと
豆摘みにつつらをはげます

富田は、逆境にあっても忍耐せよと子供たちを励まししながら、我が身に鞭打って子供たちのために耐えたのであった。

富田の短歌を読むと、辛抱を重ねて、投げ出すことなく、焼け付くような開拓地を耕作していったその動機を探る手掛かりが得られる。殊に、接ぎ木した桜の木を象徴として使うという彼女独特の方法は、この新しい土地での自分の置かれた立場をどのように見ていたのかを明らかにしてくれるものである(前掲書, p. 539):

来む春に芽吹かむ確かさ信じつつ
丹念に接くさくらの苗木

桜の花は、春を表わすだけでなく、日本と日本人自身を表わす日本的象徴なのである。桜の木を接ぎ木することの中に、富田は日本人移民がアメリカという台木に接ぎ木されていく姿を見ているのである。そこでは、接ぎ木された枝が休むことなく成長し、そしては永久にそれを形作る一部となるのである。この象徴的意味が持つ重要性は、一世の歌集『レニアの雪』に収められている彼女

が詠んだ短歌の部の題に「接ぎ木」を選んだことでも再び強調されるのである。彼女は、種苗場での以前の仕事が接ぎ木をすることであると見ているだけでなく、恐らくは自分自身も接ぎ木をしているところだと見ているのだろう。

先の短歌で、ちょうど移民日本人の希望と夢がやがて叶うように、接ぎ木した木も蕾をつけ、成長していく季節であるが、やがて来る春を信じてやまないという気持ちを表わしているのである。やがて来る春へのこの希望が中心になっていることは別の短歌の中にも表現されている(『北米百年桜』 p. 539):

蘇る春疑はず渦巻きて
吹雪きびしき冬に耐えつつ

接ぎ木した木がその新しい環境で花咲かせるだろうという確信を持つことで、労苦の多い冬も耐え忍ぶことができるのである。とは言え、恐らくは花咲くのは次の世代になってであって、富田の世代ではないのであろう。この間、接ぎ木を施す過程は骨の折れるもので、このことは別の短歌が示している(『レニアの雪』 p. 248):

敵長き桜若木接ぎ木する
せなに灼けつく8月の真陽

1929年、富田一家はシアトルの近郊のサニーデイルに引っ越した。ここは、現在はシアトル・タコマ国際空港(シータック)が広がっているところである。その地で、一家は自分たちの種苗場を始めた。これまでよりは人口が多いサニーデイルに引っ越すことは、アメリカに来て初めて隣近所に日本人家族を持つことができるということであった。それはまた、彼女の短歌もさらに上達することでもあった。というのは、シアトルには短歌クラブがあることを聞いて、1939年にはそのグループの仲間になった。月例会には参加できなかったけれども、毎月新しく詠んだ短歌を送って批評を仰いだのだった。彼女の短歌の多くがさらに日本にまで送られて、活字になったのだった。ところが、サニーデイルでは不運と苦難の数々が続き、富田家の5人の子供たちの中の末娘と死別したり、大不況の強い影響を受けたりしたのであった。サニーデイルに住んでいる間に富田はクリスチャンになったが、そのためその後詠む短歌には彼女の新しい信仰を反映しているものが多い。

富田家を作ったささやかな経済的利益も、1941年12月に母国と受け入れ国との間の戦争の勃発によって一掃されてしまった。帰化の権利を拒否されていたから、日系移民は全て外国人であったのだが、今や敵国外国人となったのであった。その上、彼等の合衆国生まれの子供たちすら疑わしい者と見なされたのであった。古くからの反

日運動が再び燃え上がり、今度はアメリカの法史上最も大規模な市民権侵害事判の一つをまんまと成功させてしまったのである。何らかの犯罪を犯したという正式の告発もないままに、11万人以上もの一世と、彼らのアメリカ合衆国市民である子供たちが、西海岸の自分たちの家から立ち退かされ、強制収容所に監禁されたのであった。1945年まで、自宅に帰ることは許されなかった。殆どのシアトルの日系人はアイダホ州のミニドカに強制収容されたのだったが、富田一家のようにシアトルから外れた地域に住んでいる者たちは、1942年にカリフォルニア州のトゥーリーレイクに強制収容された。1943年の暮れには、ワイオミング州のハートマウンテンに移された。この地で、皮肉なことに、富田はアメリカでの最初の落ち着き場所であったヤキマ盆地から来た日本人と再会したのであった。⁵⁾

真珠湾攻撃の直後、日系人社会に多くの噂が広まって、軍人たが一軒残らず日本人の家を捜索して日本人と結びつくような罪証がありはしないかと捜しているというものであった。やがては、「収容所」と呼ばれる何やら恐ろしいものについての噂が出た。このような緊迫状況の中で、富田は自分が詠んだ貴重な短歌の原稿を寄せ集めて、畑に持ち出してすっかり焼き捨てたのだった。その短歌の中に記録されている自分だけの考えが曲解されて、家族に害を及ぼすものとされてはいけなと恐れられた。自分の歌を焼かねばならない状況に追いやられたことは、富田にとっては戦争の最も辛い思い出の一つとなっている。かくして、彼女の人生を短歌で記録したものの大半が一扫されてしまったのであった。

しかしながら、原稿は焼却されたのではあったが、短歌の全てが失われたというわけではなかった。焼却された短歌の多くは、富田の心に深く刻み込まれて残っており、後年思い起こされることになるのであった。記憶に容易に留まるが故に、短歌は文字使用以前の歴史を伝承によって保存をし、世代から世代へと伝えていく方法であったことはたびたびのことである。

1941年12月、日本と合衆国の間に戦争が勃発した時は、春は来ないだろう、たとえ次の世代になっても、とそう思うものであった。戦争の数期間は、一世の女性にとっては困難な年月であった。長い年月苦労を重ねてやっと手にした僅かばかりのものが一夜のうちにもぎ取られてしまったのだった。開拓してきた土地からの立ち退きを政府に強制され、拳句の果ては想像をはるかに絶するようなアメリカの孤立し荒れ果てた地域に収容されたのだった。敵国人収容所は、人里離れた砂漠地であった。ところが、鉄条網に取り囲まれたこのような地にあっ

ても、一世の収容者たちの創造精神は生き残ったのである。収容所の中での創造的芸術は、磨き上げられたセージブラッシュの根の細工から始まって、完成の域に達した歌にいたるまでの種々の形をとって表現の場を見いだしたのであった。収容所に入って初めて日本の短歌を書くことを学んで、収容所を出た後も書き続けた一世たちも多くいた。⁶⁾

ハートマウンテンでは、何年でも続いていくように思える収容生活をゆったりと送るために、富田は他の一世たちと一緒に短歌の講演や授業に出た。富田は、自分が出した授業の内容を自分が作った短歌と一緒に日記をつけることを始めた。これは、自分が焼却した数冊のものに代わる新たな1冊であった。富田の短歌の記録を読むと、最初の下書きから次の下書きへ、そして最終の形に仕上げられていくまでの変化の跡が分かる。この短歌の中にこそ心の慰めを見いだした一世も多く、このことを富田が1943年にトゥーリーレイクの敵国人収容所で書いた短歌の中で書き留めている(『レニアの雪』p. 243):

鉄柵の中の明け暮れ歌詠みて

戦時の憂い僅かに慰む

ヤキマの砂漠地でしたように、困難事に取り込まれた時には自らを慰めるために短歌にすがったのであった。しかしながら、いつものように、彼女の歌はまた希望を反映するものでもあった。トゥーリーレイクでの収容生活の悲しみと不安の真つ只中にあっても、1943年1月、まだ次のように書くことができたのである(前掲書、p. 243):

夜の闇の明けて射す光仰げとぞ

戦時収容所に初日昇り来

元旦は、新たな出発の希望、過ぎし年の暗闇に自由の光が差し込んでくるのかもしれないという希望を意味していた。ところが、自由は足早にはやって来るものではなかった。この戦争はなおも続いた。1944年に書かれた富田の短歌は、生まれた国と、自国民として認めてくれてはいなかった受け入れ国との間で戦われた戦争に身を捕らわれてしまった一世が体験した心の内なる混迷を映し出している(前掲書、p. 243):

曇り来る心如何にせん邦字紙の

戦況ニュース今日も読みつづ

戦争がやっと集結した年、1945年には富田一家はミネソタ州に住んでいた。この年の初めごろ労働釈放を得ていたのだった。一家を我が家から引き離し、一家を捕虜の身とさせていたあの戦争は終わったが、それなのにこの戦争の集結はほろ苦い知らせであった(前掲書、p. 243):

“War is over”と狂喜乱舞の白人の中に

夫と吾哭きて夜すがら

日本は負けたのだ。恐るべき原子爆弾が落とされていた。日系アメリカ人は、何の弁明もなく何年にもわたって収容されていた収容所からとうとう釈放されたのであった。戦争中の悲しみと苦労が終わって味わう喜びと安堵の気持ちは、戦争の余波と破壊がもたらす悲しみと不確かな行く末などと一緒にやって来たのであった。富田は、日本にいる家族の身の上を案じ、またアメリカでの自分の身の上にこれから起こるであろうことにお互いが案じていることに思いを巡らした（前掲書、p. 243）：

許されし故国への便り「無事」とのみ

今日を書くなり五とせぶりに

故国の家族との繋がり再びできたのだ。戦争がもたらした消息の途絶えは、「私たちは無事です」といういとも簡単な言葉で終止符が打たれたのであった。

一家は確かに無事だった。また一つ困難を乗り越えて来ていたのだったが、今や再び一からやり直さねばならなかった。彼女はこう詠った（前掲書、p. 244）：

鉄柵の中ゆ帰還りて五とせに

再建（たて）し生活よかりそめならず

彼女の短歌は、強制収容所から帰っても、生活の再建のための長い苦労が待ち受けている日系アメリカ人に対する冷たい現実を表わしている。確かに「小さな事」ではなかったが、富田は自分の生活を建て直していったのだ。収容されていたために、富田一家は種苗場をなくしてただけでなく、かと言って別の事業に投資する資金も無かった。富田は手に入った唯一の賃金労働の仕事をした。シアトルで裁縫職人となった。ところが、この仕事が彼女に新しい世界を広げたのであった。

シアトルで、他の移民女性たちと肩を並べて裁縫の仕事しながら、富田は別の民族出身の女性たちと近付きになり、またその女性たちを一層理解できるようになったのであった。お針子をしている時に書かれた何首もの短歌には、同僚たちと共にしたごく普通の経験や気持ちを、徐々に意識していくところが表われている。その一首に次のものがある（前掲書、p. 243）：

ドイツ婦人とミシン踏みつつ相思ふ

思ひに語る故国の戦渦を

富田とこのドイツ婦人は、何千マイルも離れ、異なった文化的伝統を持つ二つの別々の国からやって来ていたのだったが、ここ仕事場では戦時体験を分かち合って、一つになったのである。

富田の戦前の短歌は、概ね自分と自分の家族を題材として扱っていたのだが、今や他の人々を観察して生気あ

るものとなっていた。昔の農村での生活は孤立した境遇であったのと対照的に、都会の仕事場は多民族、多文化のアメリカ社会の縮図を成していた。富田もその社会の一部であったのだが、より物語風の一連の短歌の中で、富田は白人労働者と黒人労働者の間の対立も観察しているが、一般的には彼女の短歌は民族の垣根を越えて女性労働者の間に見られる姉妹のような仲間関係を示唆するものである。

富田の短歌は、一緒に働いた様々な女性に命を与えている。そのような女性の中には、その声が余りにも美しく、歌えばその声はミシンの喧騒の中でもはっきりと聞こえて力強いものであった黒人女性がいたし、あるいは、とても快活で苦労など無いように見えて、また少しばかり日本語を習った経験があったので、富田と話をするのに役立つ、というフィリピン女性もいた。富田は、このような経験をしみじみと味わい、また大切にしていた（前掲書、p. 245）：

異人種の中に交わりてミシンを踏む

たつきも楽し幾年慣れて

富田が他の民族集団の人々との交友をますます感謝するようになってきたが、その点は彼女のイタリア人隣人を題材にした一連の短歌にさらに表わされている。その一連の作品の最初の歌に、近所に多くのイタリア人が住んでいること、そしてその大半は勤勉に働く農民たちであったことを書いている。富田はその勤勉さを賞賛したが、それがあってそのイタリア人への親近感を覚えたのであった。その次の歌で、富田は再びこのテーマを取り上げた（前掲書、p. 246）：

勤勉は吾が民族に似るイタリアン

終日野良に娘も主婦も

共に農業の辛い仕事をしたという過去があるからこそ、富田はこれらのヨーロッパからの移民たちには経験が相通ずるものであると分かった。この気持ちは相手も同様であつたらしく、その証拠に、それに続く幾首もの短歌を読むと、少なくともイタリア人隣人の一人は、日本人の隣人たちと辛い仕事を共にしたり、野菜を分け合ったりすること以上に、生まれた故国から離れての移民の体験を分かち合ったのであった。

相通ふ想いに語る己（し）が祖国

語調熱おびて此のイタリアン

戦後は、富田の歌がより都会的、多民族的意識を示しているだけでなく、より全世界的な物の見方を示していることが分かる。戦争がもたらす恐ろしいほどの犠牲は十分に理解していたからこそ、富田は自分の子供たちが非常に高い代価を払わねばならなくなってしまう戦争に

まで発展していくかもしれないような、そういう世界的な事件を十分に気を付けて見ていたのである（前掲書、p. 250）：

吾に未だ若き男の子あり

永久の平和をぞ禱る荒きの世の日々に殊に、富田は核兵器競争に激しく反対をし、一連の短歌をこれを主題に詠った。ビキニ島の核実験の犠牲者たちのニュースは、彼女の心を揺さぶり、こう詠わせている（前掲書、p. 251）：

科学の威力寧ろ呪はん

癒え難きビキニ患者の症状読みて

日本は、核軍縮運動の先頭に立つ国であると書く（前掲書、p. 252）：

死の灰の体験の国日本が

訴ふるこえ必死の声を

この一連の短歌の中の別の1首では、富田は、核爆弾の禁止は原子爆弾の唯一の被爆国である日本の血によって既に書かれてきたものであるのだと述べている。しかしながら、彼女は悲しく詠うのである（前掲書、p. 252）：

被災国の悲願をよそこに着々と

原子爆弾は造られてあらむ

何十年もの辛い労働の末、富田は遂に自分の家を持つ夢をかなえることができた。夢がかなった喜びが一連の短歌に残されている（前掲書、p. 249）：

図を引きて吾が好む家を愉しみし

長き夢今ぞ現実となりぬ

自分たちの代にはこの夢を実現させる望みはないと殆ど諦めていた時に、夢が現実となったのであった（前掲書、p. 249）：

果たさざる希ひを子らに懸けて来し

幾年月ぞ家居は成りぬ

ところが、アメリカで遂に夢がかなったこの喜びも、また打ち碎かれることになってしまった。彼女のサニーデイルの家というのは、シアトル・タコマ国際空港のすぐ北側にあったのだ。やがて、飛行機が立てる騒音が彼女の家を揺さぶったのである（前掲書、p. 245）：

滑走路なほ拡張の計画といふ

爆音は迫らむいよよ身近に

空港は、周辺住民の苦情や困惑にも拘わらず拡張されていった、と彼女は書いた。空港の拡張が周辺の環境を変えてしまった（前掲書、p. 246）：

農園も家もいつしか影断ちて

目路ひろやかに滑走路成りゆく

家々や農場がなくなり、そこにいた人々もいなくなった。シアトル空港当局は、騒音や低空飛行のジェット機に対

する苦情には、その苦情を申し立てる住民を移転させることで応えた。土地収用権を行使して、富田のような住民の所有地を収用すると、シアトル・タコマ国際空港周辺に緩衝地帯を設けたのだ。1967年に、富田は再び移転を強いられたのであった。これまでの何度かの場合より幸運だったのは、彼女と夫は引っ越しても、シアトルの娘の家族と同居できたことである。

時が過ぎていくことをひしひしと感じているところが、富田のその後に書いたものの大きな部分を占めている。矢のように過ぎ去っていった数十年の開拓時代を振り返って、彼女はこう書いている（前掲書、p. 251）：

子らを育て開拓の夫を援けたる

日は遙かなり二人老いつつ

別の1首は、引き続いて老いのテーマである（前掲書、p. 251）：

二重眼鏡にもの読む夫よ

幾十年奮闘の皺を深く刻みて

若い頃に果たし得なかった望みの数々への思いが浮かんでくる。富田にとっては、思い出される事ごととは、無残にも打ち碎かれてしまった勉強を続けたいという望みのことであった。一連の短歌の中で、彼女は学問をしたいという願いの数々を思い起こしている。それは、卒業祝いとして貰った宝箱に象徴されているのである（前掲書、p. 247）：

生涯の記念と愛しみトランクの入れて

三十年の蒔絵の硯箱（はこ）

この祝いの品に添えてあった言葉を覚えていた。知性と精神はいつまでも鍛えるようにと諭す言葉であった。とは言っても、アメリカに来てからは（前掲書、p. 247）：

三十年の異国のたつき

筆墨を使う事なく慌しけれ

正式な勉強をする暇は全く無かった。ヤキマの畑で一人短歌を書いていたのだ。シアトル地区に引っ越してきた後とて、なるほど短歌クラブに入会はできたけれども、月例会に出席することもかなわなかった。種苗場は、休む暇も無いほど彼女が世話をする必要があったからである。

取材の途中で語ってくれたのは、彼女の生涯は一言「忙しい」—busy—という言葉で要約できようということであった。片時といえどもしなければならぬ事ごとが山ほどある生涯であったのである。⁷⁾ 勉強という贅沢なことに対する思いはどうかと言えば（前掲書、p. 247）：

学一つに精魂こめし

遠き日の又還るなし異国に老いて

なるほど、アメリカに定住する接ぎ木の過程では、彼女の念願は脇に退けておかねばならなかったのではあったけれども、次の世代になれば夢の実現はあるのだと常に信じて疑わなかった。次の世代には、接ぎ木した木に花が咲き、実を結ぶはずであった。もしも子供たちが、自分自身の夢や望みを果たすことができるというのであるのなら、富田にとっては多くの苦闘も十分に闘う価値のあるものであった。富田は、子供たちが一家のあのひどい生活に悪影響を受けることがなかったことを非常に喜んだのであった（前掲書、p. 246）：

虹の如き夢持てる娘よ母吾れの
貧しさに染まらずかく朗らかなり

繰り返し次々と行く手を妨げるものが現れたアメリカでの彼女の生活の大半は、貧乏の思い出ばかりであるが、このように書かせている（『北米百年桜』 p. 173）：

断腸の嘆きに吾を耐えしめしものは
何なりし冬来れば噫う

子供たちのことを思ったからこそ彼女は働いた。苦労と悲しみの冬の時代をずっと支えてくれたものは、自分たちに春がやがて来るだろうという希望であった。歌の中で、子供たちが大学へ進み、結婚し、そして新しい、胸を躍らせるような仕事に就く、そのめでたい喜びを祝うのである。彼女の歌には、自分の子供たちは自分が耐えてきたような試練も艱難も受けることはないだろうということを自分で確信しているところが表われている（『レニアの雪』 p. 250）：

子の門出雲ひとつ無き朝晴れや
何処までもつづげ希望の碧空

彼女の苦労は子供たちの人生に悪影響を与えることはなかった。むしろ、その将来を確実にしてくれたように思われる。1968年に、希望を込めて次のように詠うことができた：

The centennial of
The Japanese immigrants in America
Our next generation
With a great future before them⁸⁾

それから15年後、富田はアメリカでの60余年もの人生体験を振り返って、こう結論している：

The bitter ordeals I have suffered
One after another
As I remember
Now without sorrow
Filled with grace⁹⁾

富田の最近の歌には、彼女の孫たちもまた、彼女の冬の時代の辛苦の数々のお陰で巡って来た春を享受してい

ることへの感謝の気持ちが次々と表われている。

1983年の夏の一連の短歌には、孫娘のサラローレンスカレッジの卒業式に参列するために東海岸に旅行したことを書いている。卒業と共に、第3世代の接ぎ木に新しい花が咲き、祝福が各世代を結んだのであった。各世代を結ぶ絆が強固なものであるように思えるのは、例えば彼女の孫たちは努めて父母とは日本語で会話しようとしていることでも分かる：

From my granddaughter in New York
A letter in Japanese
As I read it
Tears of joy overflow¹⁰⁾

文学的価値はどのようなものであろうとも、小論に収めた短歌は、富田貞子の生涯についての貴重な情報を提供し、またその生涯への洞察を与えるものである。歌の1首1首が、彼女の人生の際だった出来事や思いに関連して日記の中に書き込まれたものである。一連の短歌で、彼女の人生のある特定の出来事を一部始終記述している場合もしばしばある。単なる日記以上のもので、この短歌は詠み手が心の内に思った所と感じた所を披瀝しているものなのである。短歌評論家の松井秀子は、シアトルの短歌クラブが選歌をし、日本に送り、それを活字にして掲載した日本の短歌誌『潮音』に載せた文の中で、こう確信を述べている：「『レニアの雪』に収められている富田が詠んだような短歌は確かに簡潔で、人を感動させる古典的な特質を備えているのだが、これらの短歌の重要性はと言えば、日本の短歌という伝統的な形式を用いて移民たちの歴史を語っているところにある」¹¹⁾と。事実、一世の短歌が持つ歴史的価値と文学的価値の両方共に、今後一層検討する価値があるのである。¹²⁾

日系アメリカ人のアメリカにおける体験を理解する手段としての一世代の短歌の価値が認められて、英訳された歌集が刊行されるに至った。そのような短歌集の一つが *Poets Behind Barbed Wire*（鉄条網の向こうの詩人）である。¹³⁾ これには、第2次大戦中強制収容されたハワイの一世が書いた日本の短詩である俳句と短歌が収められている。この短歌集の編者たちは、「筆記用紙が不足していたことを考えると、これらの短い詩は長々と書く日記ほどの煩わしさも無かったので、収容者の鬱積した感情を表現するには理想的な形であった」と書いている。さらに、「それはまた、散文によらないで、短い詩を通して最も内なる気持ちを表わそうとする日本の伝統を守っているのである」と指摘している。編者たちは、一世の収容所生活を表現する短い詩のほうが、その体験を書いた散文よりはるかによくできており、またより

明瞭に表現しているのだと、確信しているのである。¹⁴⁾ 確かに、鉄条網の向こうの詩人の一人が、仮收容所から敵国人收容所へ移されるときに持ち込むことができた僅か2枚の紙に何百首もの歌を走り書きしていた例がある。

富田を初め多くの一世代にとっては、短歌は自分の感情を芸術的に表現するものであると同時に、子孫のために自分たちが体験した生活を記録しておく手段でもあった。短歌を書く場合、自分たちの歴史——それはアメリカ移民者についての一般的などんな歴史にも書かれることは無いだろうと確信していた歴史だが——を記録に留めて置く役割があるのだと自覚していた。別の一世の女性歌人の手代木慶子はこう書いた：

移民史に残らぬ君の苦闘史は

ただ我が胸の奥処に印す¹⁵⁾

富田にとってそうであったように、桜の木は一世に共通の日本と日本人の象徴であった。手代木もまた、富田の短歌に類似の短歌を1首詠んだが、それは一世を日本の島に根を下ろしながらアメリカ大陸に適應する桜の木である、と言っている：

大陸になじめぬ桜の木は小さし

紅葉することもなくて散りゆく¹⁶⁾

大層な苦難にも拘わらず、一世移民たちは確かに新しい環境に適應していったのだった。富田のように、歌に表現することでその適應がより耐え易いものとなった者もいた。彼等の歌が、今度は、我々がその適應と生存の歴史を理解しようとする時に役立つわけである。

小論の中で紹介したような富田貞子の人生は、ワシントン州における一世女性が経験した相当に辛苦に満ちた生活を一般的に代表するあらましである。ワシントン州への初期の日系移民者は若くて、独身男性が支配的であって、女性たちが大挙して入って来たのは1907年から1908年にかけてのいわゆる「日米」紳士協定で、これによって合衆国への日本人男性労働者のその後の移民を制限することになった後のことである。富田もそうであったように、アメリカにきた女性の殆どは、すでに定住している移民者の妻であった。その結婚も、女性の家族がワシントン州に住む日系男性移民者と写真を交換することで調えた「写真花嫁」が多かったのである。1921年以降は、日本政府が写真花嫁には旅券を発給しなかったため、花婿の殆どは富田の夫がそうであったように、日本に出向いて結婚し、妻を伴って帰って行った。1924年、合衆国議会は「市民権を得る資格のない外国人」の移民を禁止する新しい移民帰化法を可決した。この範疇は、合衆国最高裁が1922年のオザワ判決と、1923年のシンド(Thind)判決によって新たに作った範疇で、モンゴロイドを人種

と規定し、したがってインド人は帰化の資格なしとしたものであった。したがって、1924年以降は、日本からは、男女を問わず、移民がこの国に到着することはなかった。それでも、日系男性は、1908年から1924年までの間は妻を迎えに行くことが許されていたので、ワシントン州では日系女性の数が劇的に増加した。¹⁷⁾

1910年から1924年までの間にやって来た日系女性は、ワシントン州における日系アメリカ社会の発展に重大な役割を演じた。富田の[夫の]ように妻を呼び寄せることによって、農園や事業での経済的関心よりはむしろアメリカに永住する気持ちが強くなったのであった。妻がやって来ると、家庭生活が定着し、日系アメリカ人家族が生まれ、1900年から1930年の間にはアメリカ生まれの子供たちの数が劇的に増加した。一世が、自らの将来をよく見詰めて、アメリカにおける我が子たちの将来と重ね合わせて見始めるようになってくると、この第2世代の誕生と共に、移民社会から永住者社会へと移り変わっていくことになるのだった。日系移民社会に女性が入っていることは、日系移民社会がその根をアメリカの土に下ろす過程で欠くことのできない要件であったのだ。女性の到着は家庭生活を営む社会がアメリカにも確立されるという保証となった。日系人社会は、学校や教会やクラブや組合などを中心に家庭の配置を進めた。女性たちは、その社会と、日本文化の両方をもたらした。例えば富田のように、高い教育を受けていた者もしばしばいたが、そのような者は学問を愛するとか、芸術を鑑賞するとかいった価値を捨てることはなかった。

ヤキマ盆地とサニーデイルとシアトルでの働き詰めであった富田の生涯は、日本人女性の開拓者は単に妻であり母であったというばかりでなく、労働者であったことをまた強調するものである。女性の労働力は、農園や、小事業や、あるいはレイバーキャンプでも不可欠であって、そのことはごく小さな店とか小さな農園などの家内工業的事業での場合と同様であった。日系女性たちは、この新しい土地で極めて重大な経済的役割を果たしたのであった。

日系女性の大半は、最初は農村地帯に住み、夫が農夫として土を耕すのを手伝った。日系農業者は、ワシントン州では殊に優れていた。都会地では、女性たちは夫が経営する小事業に加わって、例えば洗濯屋、市場、食堂、下宿屋などで働いた。あるいは、女中になったり、お針子になったり、缶詰工場で働いたりした。鉄道や木材切り出し現場や製材所へ労働者を世話するレイバーキャンプは、しばしば一世の男性が切り盛りしていた。このようなレイバーキャンプで働く一世の女性も多かった。ヤ

キマに住んでいた数年間富田がそうであったように、女性たちは夫が使っている大量の労働者の食事の世話をした。

日系女性は、収入を稼ぎ、子育てをし、食事の準備をし、買物をし、あるいは病人の介護をして、家族を維持するために不可欠な仕事をしたのであった。女性には、家庭の管理での重要な役割と、また貴重な経済的役割とがあったからこそ家族のために決断を下すような際には、日本国内の女性が持っているよりはもっと大きな力を持った。その上、開拓の地では、一世の女性たちはあのみまっただからとやかく言われるというようなことも無かったから、これがまた家族の中での影響力を大きくした要素であった。

1930年代には、男性は齢を重ねており、女性の家族の中で力が増した。一世男性の多くが、1930年代には55歳を出ていた。男性が年を取る一方で、その妻たちはおしなべて10歳は若かったので、増えてきた経済的な責任を背負い、重要な決断をさらに多く下すようになった。日系女性は、かくして日系アメリカ人家族のますますもって活動の中心となったのであった。

一世女性たちが、ワシントン州で家庭を持つのは容易なことではなかった。彼女たちが直面した最も続いて深刻な困難は、反日感情であった。すでに見てきたように、日本人は人種的理由で帰化を拒否され、したがって受け入れてくれた国に外国人として留まるように言い渡されていたのだ。ワシントン州では、「市民権を得る資格の無い外国人」であるという身分のため、一連の反外国人土地法によってその経済的機会を厳しく制限することが可能であった。これら反日政策の頂点は第2次大戦と共に到来した。この時、何千人というワシントン州の日本人は、外国籍であろうと米国籍であろうと皆ひっくるめて、強制収容所へ移された。

戦後、一世の開拓者はもはや退職の年齢に近づいていたのだが、一からやり直さねばならなかったのである。富田と同じように、一世女性の多くは収容によって財産も資金も取り上げられてしまっていたので、縫製工場で働くとか、女中になって働くとかしなければならなかった。富田の戦後の都会生活を見ると、日系アメリカ人が戦後は都会に移り住んで働く、という一般的な変化の姿を見せるものである。

戦後何年かが経って、一生懸命に働いたことが再び実を結んだ。とは言え、もっと手厚い条件が与えられていたならば可能であったかもしれない、などというほどの大きな収穫ではなかったのだが、開拓者の子供たち、つまり二世は結婚し、その子供を儲けた。第3世代が生まれた。一世の女性たちは、苦勞の年月を振り返って見て、

自分たちがアメリカに初めてやって来た頃の若い時の望みが孫たちの中で実現されるのを見たのであった。接ぎ木は遅しく、それを受け入れた地でしっかりと根を下ろしていることを確信したのであった。子供たちと孫たち、つまり接ぎ木の第2世代も第3世代の枝々も、ついに巡って来た春の季節に今や花咲かせているのである。富田は1983年5月にこう書くことができた：

The seeds I planted
Sprout and grow up
Even in this very old body
Joy overflows¹⁸⁾

富田や他の一世女性開拓者の苦闘を通して、ワシントン州の歴史は豊かになったのであった。

〔注〕

本原は、Karen J. Blair, *Women in Pacific Northwest History: An Anthology*. Seattle: University of Washington Press, pp. xiv+259, 1988, に収録された論文 Gail M. Nomura, “Tsugiki, a Grafting: A History of a Japanese Pioneer Woman in Washington State” (同書, pp. 207-229) を翻訳したものである。同書はタイトルにあるように、アメリカ北西部の女性史の研究書として出版以来評価の高いものである。

編者の Karen J. Blair は、ニューヨーク州立大学(バッファロー校)で博士号を取得、出版当時はワシントン州立セントラルワシントン大学の歴史学の助教授であった。

訳出論文の著者の Gail M. Nomura は、ハワイ大学で博士号を得た歴史研究者であり、シアトルの歴史の社会的・政治的研究を続けている。

前出書の全体の日本語への翻訳は、土居万亀子(教授・図書館学・付属図書館定期刊行物部長)がセントラルワシントン大学大学院研究委員会の特別研究費を受けて1989年に着手した。1991年9月から翌年1月まで島根大学に共同研究者として来学し、ほぼその草稿を完成させた。その一部を発表する。

山田は、その原文を詳細に読み、翻訳の草稿を検討した。アメリカの言語文化研究を専門としているためこの仕事には大きな関心があった。原注以外にいくつもの注を新たに加える必要があったが、スペースの関係で断念した。

〔原注と訳者注〕

(ただし不必要と思われた原注の一部は省いた)

1) 1920年、1930年、及び1940年の国勢調査によると、

- ワシントン州の日系女性が最大の非白人女性であって、ネイティブアメリカンの女性を入れても、非白人人口の殆ど半分を占めていた。
- U.S. Bureau of the Census, *Sixteenth Census of the United States (1940), vol. 2: Population 2: Characteristics of the Population* (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1943), pt. 7, Utah-Wyoming, p. 304, を参照せよ。
- 2) ワシントン州における一世女性に関する最も優れた情報源は, Kazuo Ito, *Issei: A History of Japanese Immigrants in North America*, trans. Shinichiro Nakamura and Jean S. Gerard (Seattle: Executive Committee for Publication, Japanese Community Service, 1973). これは, 伊藤一男『北米百年桜』(東京: 北米百年桜実行委員会, 1969) の英語翻訳版である。同書には, 太平洋北西部での生活を思い起こして一世女性を書いた文や詩が収められている。
- 3) [訳者注] 英語は“extended family”で, これは社会学の用語。親子のみならず直系家族・婚姻家族も含む大家族のこと。
- 4) 三原川柳他『レニアの雪』(鎌倉: 潮音社, 1956), p. 249. この短歌集は富田の短歌が公表された最もよい歌集である。初期の短歌には詠まれた日付の注があるものがある。それが無いものでも, 富田は歌に出る事件と同時に歌を書いているので, その内容によって詠まれた日付が分かるものもある。より最近の短歌の最もよい出典はシアトルで発行されている『北米報知』新聞である。この新聞には富田の短歌が毎月掲載された。
- [訳者注] 原論文で引用された短歌の英訳は, 論文執筆者の Nomura の手になるもので, これは必ずしも富田の歌が持つ美しさやリズムやニュアンスを伝えるものではないと断っている。
- 5) Frank F. Chuman, *The Bamboo People: The Law and Japanese Americans* (Del Mar, California: Publisher's Inc., 1976) を参照せよ。また, 拘束法や日系アメリカ人の収容に関する情報は, 以下のような資料を見よ: Commission on Wartime Relocation and Internment of Civilians, *Personal Justice Denied* (Washington, D.C., 1983); Roger Daniels, *Concentration Camps: North America* (Malabar, Fla.: Robert E. Krieger Publishing Company, 1981); Peter Irons, *Justice at War* (New York: Oxford University Press, 1983); Michi Weglyn, *Years of Infamy* (New York: William Morrow, 1976).
- 6) ワシントン州シアトル市のトシコ・トクへの1983年7月25日の取材。トクは, 第2次大戦中に敵国人収容所で川柳を習った。
- 7) ワシントン州シアトル市の富田貞子への1983年7月26日の取材。
- 8) 伊藤一男『続北米百年桜』(東京: 北米百年桜実行委員会, 1972)。元歌未確認。
- 9) 「シアトル短歌会」『北米報知』(シアトル), 1983年5月25日付, p. 7。元歌未確認。
- 10) 前掲紙, 1983年10月12日付, p. 5。元歌未確認。
- 11) 松井秀子「レニアの雪の意義」『潮音42』, 6号(1956), pp. 27-28。
- 12) アメリカの背景, 歴史, および文化が一世の詩の創作にどのような影響を与えたかについては次のものを参照せよ: Stephen H. Sumida, “Localism in Asian American Literature and Culture of Hawaii and the West Coast,” *Hawaii Literary Arts Council Newsletter 71* (August-September 1983): n.p.
- 13) Keiho Soga, Taisanboku Mori, Sojin Takei, and Muin Ozaki, *Poets Behind Barbed Wire*, ed. and trans. Jiro Nakano and Kay Nakano (Honolulu: Bamboo Ridge Press, 1983).
- 14) 前掲書, p. vii.
- 15) 三原『レニアの雪』p. 239.
- 16) 前掲書, p. 240.
- 17) 合衆国国勢調査(1940)報告書, p. 304.
- 1900年にはワシントン州には185人の日系女性がいた。その中には, 合衆国生まれの21人が含まれていた。1910年には1,688人, 内347人は合衆国生まれ。しかし, 妻や写真花嫁の移民が入って10年後の1920年には6,065人の日系女性がいて, 内2,117人は合衆国生まれ。1920年から1940年までの間, 日系女性はワシントン州で最大の非白人女性群であった。
- 1920年, ワシントン州の非白人女性13,836人中日系女性は6,065人であった。1930年には, ワシントン州の非白人女性16,744人中7,637人が日系女性で, 内4,308人が合衆国生まれ。15,975人中日系女性が6,532人で, 内4,234人は合衆国生まれ。一世日系女性の数は1920年から1940年の間に実際に減少したのだったが, これは一世の経済的機会を著しく制限する法的規制が増えたからであった。このため, 一世は別の州に出て, よりよい機会を求めなければならなかった。
- 18) 「シアトル短歌会」『北米報知』1983年6月8日付, p. 7。元歌未確認。